

# 平成三十年度

## 一般入試② 問題（国語）

### 注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二一ページまであります。万一、足りない部分があつたり印刷が見にくかつたりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠の中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。

「私」（津川紗英）は三姉妹の末っ子で、二人の姉たちにかわいがられて育つた。中学の時の同級生である朝倉くんと活け花教室で再会し、彼が活けた花を見て、その美しさに心をうばわれる。以下はそれに続く部分である。

1 活け花教室で次に朝倉くんと会ったときに私は訊いた。  
「まだまだ、つて、どうしてわかるの？」

え、と朝倉くんが顔を上げる。

「こないだ、まだまだだつていつたよね。どうしてそう思うの。どうしてわかるの。どうしたらまだだじやなくなるの」

まだまだ届かない、思うようには活けられない。朝倉くんは自分の花をそう評した。

2 「ちよつと、紗英」

千尋が私の左肘をつついて止めようとしている。千尋は親切だから私が突っ走り気味になると上手に制御してくれる。

この活け花教室を紹介してくれたのも千尋だった。

「わかるときはわかるんじやないかな」

真面目な声で朝倉くんはいった。それからちよつと笑つた。

「千尋だとは考えなかつたんだね」

「え、千尋だつたの？」

私が驚くと、冗談だよ、という。

「花を活けてると気持ちがいいだろ。思つた通りに活けられると、気持ちのよさが持続する。そのやり方をここに習いに来てるんだ。みんなもそうなんじやないの」

3 「なるほど」

私は感心して何度もうなずいた。

「気持ちのよさが持続する。なるほどね」

朝倉くんは、やめて、恥ずかしいから、といった。  
「なるほど。気持ちのよさを持続するために」

うなずきながらもう一度私がいうと、朝倉くんはしつしつと追い払う真似をした。

思つた通りに活ける、と朝倉くんはいつたけれど、私の「思つた通り」じゃダメなんだと思う。私なんかの思つたところを超えてあるのが花だ。そう朝倉くんの花が教えてくれている。

じゃあ、なるべくなんにも考えないようにして活けてみよう。

その考えは、しかし間違ひだつたらしい。

4 「津川さん、真面目におやりなさい」

先生は巡回してきて私の花を見るなりそいつた。  
「しようがないわねえ」

いつもなら、注意されることはあっても先生の目はあたたかい。しようがないわねえ、と笑つてはいる。でも、今日は違つた。基本形を逸脱しためちやくちな花がよほど腹に据えかねたらしく、劍山から私の花をぐきぐき抜いた。

「どういうつもりなの」

声は怒りを抑えている。周囲の目がこちらに集まっている。

「いつもの津川さんじやないわね。遊び半分で活けるのは、花を裏切ることになるの」

すみません、と私は謝つた。遊び半分なんかじやなく、真剣に考えたらこうなつたんだけど、普段は穏やかな先生の剣幕を見たらやつぱりそれはいえなかつた。先生は花を全部抜くと大きくため息をついて、ふいと立ち去つてしまつた。

千尋と目が合う。どんまい、と目だけで笑つてくれる。もう一度水切りをしなおして、少し茎の短くなつてしまつた花を見る。またいつもみたいに、習つた型の通り順番に差していくんだろうか。型通りなら誰が活けても同じじやないか。私はこつそり辺りを見まわす。みんな、おとなしく従つてはいるのはなぜなんだろう。——そんなふうに思うなんて不遜だし傲慢だ。だけど急に、目の前の花が色褪せて見える。もしかしたら活け花はどうしても私がやらなきやならないことじやないの

かもしれない。

このまま塾に行くという千尋と別れて帰ろうとしたら、市民センターの出口のところに朝倉くんがいた。自然にふたり並んで歩き出す。

「どうして私を待つてたの、とか訊かないか普通」

朝倉くんがいうので初めて気がついた。

「そつか、朝倉くん、あたしのこと待つてくれたんだ」

「……いいよなあ、さえこは」

さえこ。懐かしい呼び名だ。久しぶりに聞いた。さえこ、さえこ、と中学のクラスメイトは呼んだ。ほんとうの名前は紗英なのに、そこになぜか子をつけて、紗英子、それが私の愛称だった。紗英、と呼び捨てにするほど親しくない同級生たちにとつて、子をつけるだけでフェイクになる。<sup>6</sup> 紗英子なら呼べる。そういうことらしい。彼らは私を呼びたかったのだ。さえこ、さえこ、と気軽に愛称で呼べて、さえこはいいよなあ、なんていえる存在が欲しかったんだと思う。事実、私は一日に何度も名前を呼ばれ、さえこ、さえこ、と手招きされる。さえこはいいね、さえこはいいよなあ。何がいいのかよくわからないけど、みんなにそういうわれるのがこそばゆくて、うふふ、と笑う。そうすると彼らはいよいよもつて、いいよなあ、と繰り返す。

「さつきの、先生に注意されてた花、見たよ。びっくりした。あれ、遊んでたんじゃないよな、確信犯だよな」

うーん、と私は言葉を濁す。

「自分でもどうしたいんだかわからなくなっちゃった」

「それもわかつた、あの花見たら」

朝倉くんはそういって笑う。

「やりたいことはなんとなく伝わってきた。面白いと思つたよ。でも、何百年もかけて磨かれてきた技に立ち向かおうと思つたら、足場が必要だろ。いきなり自己流じや太刀打ちできない」

「あたしはべつに」

「べつに、やめようとは思つてない?」  
「うん」  
市民センターを出ると陽射しが強い。<sup>7</sup> 自転車置き場まで並んで歩く。  
「あの先生は、正に磨かれてきた技を継いできたひとだと俺は思つてる。頭は少々固いけど、習う価値はあると思うよ。だけどさえこがどう思うかは、さえこ次第だ」

「あたしはべつに」

「べつに、やめようとは思つてない?」

「うん」

嘘をついた。やめてもいいかな、とちょっと思つていた。曲がりなりにも活けた花を、有無をいわせず全部抜かれたらやつぱりめげる。

でも、朝倉くんが笑顔になつた。

「そつか、よかつた。せつかなんだから、やめるなよ」

「ありがとう」

手を振つて別れ、すぐに朝倉くんは反対方向へ走り出す。私は桜並木のほうへ自転車をゆっくり漕ぎ出しながら、朝倉くんの「せつかなんだから」を考える。せつかく始めたんだから、やめるなよ。せつかく面白くなつてきたんだから、やめるなよ。せつかく会えるんだから、やめるなよ。うん、これかな。私はいちばん自分に都合のいいフレーズを選んで口の中で繰り返す。せつかく会えるんだから、やめるなよ。うふふ、と笑みがこぼれる。

(中略)その後、紗英は学校の華道部の顧問の細谷先生に入部を勧められる。「わかるでしょう、そんなに真剣にならなくていいの。部活の間、楽しく笑つて過ごしてくれればそれでいいの。その代わり、男子なんかも勧誘してくれるとうれしいんだけどな。そういうの、得意よね」という先生の言葉に、紗英は反発し、これまでの自分を振り返る。

「あたしの花つてどんな花なんだろう」

濡れた髪を拭き、ほうじ茶を飲みながら漏らした言葉を、祖母も母も姉も聞き逃さなかつた。

「紗英の花？」

私らしい、といういの方は避けようと思う。自分でも何が私らしいのか、今はよくわからないから。

「あたしが活ける花」

「紗英が活ければぜんぶ紗英の花じゃないの」

母がいう。私は首を振る。

「型ばかり教わってるでしよう、誰が活けても同じ型。あたしはもっとあたしの好きなように」

といいかけて、私の「好き」なんて曖昧で、形がなくて、天気や気分にも左右される、実体のないものだと思う。そのときそのときの「好き」をどうやって表せばいいんだろう。

母は察したように穏やかな声になる。

「そうねえ、決まりきったことをきちんとこなすっていうのは紗英に向いてないかもしれないわねえ」

そうかな、と返しながら、そうだった、と思つていて。すぐに面倒になつてしまふ。みんながやることなら自分がやらなくていいと思つてしまふ。

「でもね、そこであきらめちゃだめなのよ。そこはすぐ大事なところなの。しっかり身につけておかなきゃならない基礎って、あるのよ」

「根気がないからね、紗英は」

即座に姉が指摘する。

「ラジオ体操、いまだにぜんぶは覚えてないし」

「将棋<sup>じょぎ</sup>だってぜんぜん定跡<sup>じょうじき</sup>通りに指さないし」

祖母がびしやりといい放つ。

「だから勝てないんだよ」

「いいもん、将棋なんか、勝てなくてもいいもん」

姉たちは将棋も強かつた。たつたひとつ<sup>玉</sup>を目指して一手ずつ詰めてゆく。ふたりが盤<sup>ばん</sup>の上できれいな額をつきあわせ、

意識を一点に集中させてゆくと、傍<sup>かたわら</sup>にいるだけで息が苦しくなつた。その点、囲碁<sup>ごご</sup>はいい。盤上のあちこちで陣地<sup>じんち</sup>の取り合

いがある。右辺を取られても左辺が残つていて。石ひとつでも形勢が変わる。将棋よりずっと気持ちが楽だ。

「囲碁<sup>ごご</sup>でもおんなんじ。定石<sup>じょうせき</sup>無視して<sup>(注)</sup>るから強くなれないのよ。いつつもあつという間に負かされてるじゃない。長い歴史の中で切磋琢磨<sup>せっさくまろ</sup>してきてるわけだからね、定石<sup>じょうせき</sup>を覚えるのがいちばん早いの」

「早くなくともいい」

ただ楽しく打てればいい。そう思つて、棋譜<sup>きふ</sup>を覚えてこなかつた。数え切れないほどの先人たちの間で考え尽くされた定石がある。それを無視して一朝一夕に上手<sup>うまい</sup>になれるはずもなかつた。

「それがいちばん近いの」

「近くなくともいい」

姉は根気よく言葉を探す。

「いちばん美しいの」

美しくなくともいい、とはいえたかった。美しくない囲碁なら打たないほうがいい。美しくないなら花を活ける意味がない。

「紗英はなんにもわかつてないね」

祖母が呆れたようにため息をつく。

「型があるから自由になれるんだ」

自分の言葉に一度自分でうなづいて、もう一度繰り返した。

「型があんたを助けてくれるんだよ」

はつとした。型が助けてくれる。そうか、と思う。そうだったのか。毎朝毎朝、判で押<sup>お</sup>したように祖母がラジオ体操から一日を始めることに、飽<sup>あ</sup>きることはないと不思議に思つていた。そうじゃなかつたんだ。毎朝のラジオ体操が祖母を助ける。つらい朝も、苦しい朝も、決まった体操から型通りに始めることで、一日をなんとかまわしていくことができたのかかもしれない。楽しいことばかりじゃなかつた祖母の人生が型によつて救われる。そういうことだろうか。

「いちばんを突き詰めていくと、これしかない、というところに行きあたる。それが型というものだと私は思つてゐよ」  
今、何か、ぞくぞくした。新しくて、古い、とても大事なことを聞いた気がした。それはしばらく耳朶の辺りをぐるぐるまわり、ようやく私の中に滑り込んでくる。

型つて、もしかするとすごいものなんじやないか。たくさんの中惠に育ませてきた果実みたいなもの。齧つてもみないなんで、あまりにももつたらないもの。今は型を身につけるときなのかもしれない。いつか、私自身の花を活けるために。

今は修業のときだ。そう思つたら楽しくなった。型を意識して、集中して活ける。型を身体に叩き込むよう、何度も練習する。さえこも紗英も今はいらない。型を自分のものにしたい。いつかその型を破るときのために。

「本気になつたんだ」

私の花を見て、朝倉くんがつぶやいた。

桜並木の土手の上を、自転車を押していく。朝倉くんが川のほうを見ながら前輪ひとつ分だけ前を行く。<sup>たた</sup>茴香が無造作に新聞紙に包まれて籠にある。車輪からの振動で黄色い花が上下に細かく揺れている。

「それで今日の花なんだね。<sup>10</sup>さえこが本氣になると、ああいう花になるんだ」

ちょっと振り返るように私を見て、朝倉くんがいう。

「なんだか、意外だ」

意外だなんてよくいう。私のことなんか知らないくせに。ふわふわのところしか見てなかつたくせに。

でもさ、といつて朝倉くんは自転車と一緒に足を止める。川原のほうを指さして、下りる？ と目で訊く。

「意外だつたけど、面白くなりそうだ」

土手から斜めに続く細い土の道を、勢いよく下りはじめる。私は後ろからそろそろと下りる。自転車のハンドルを握つて、勢いがつかないよう力を込める。一步一步踏みしめて、それでも最後は駆け足になる。自転車が跳ね、籠から茴香が飛び上がりつた。

下りきつたところに朝倉くんはスタンドを立てる。私が隣に自転車を停めるのを待つて、川縁のほうへ歩き出す。

12 「さえこが本氣になるなんて」

「ええ、つて呼ばないで。ほんとうの名前はさえこじやないの」

朝倉くんがゆつくりとこちらを向くのがわかる。私は川面が新しくなつたり古くなつたりしながら流れていくのを眺めている。

「知つてるよ」

「じゃあ、ちゃんと名前で呼んで。これがあたし、つていえるような花を活けたいと思つてゐる。さえこじやないの」

「うん」

「さえこじやなくて、紗英の花。まだまだ、遠いけど」

さえこの花は、といいかけた朝倉くんが、小さく咳払いをして、いい直す。

「紗英の花は、じつといつてない。今は型を守つて動かないけど、これからどこかに向かおうとする勢いがある」「型通りに活けたのに？」

「聞くと、大きくなづいた。」

「俺、ちょっとどきどきした」

どきどきした、と朝倉くんがいう、その声だけでどきどきした。朝倉くんがまた川のほうを見る。太陽が水面に反射してまぶしい。

（宮下奈都「まだまだ」）

㊂ 逸脱：あるべき姿から外れてしまうこと。

劍山：花や枝の根などを刺して固定するための土台として使う活け花の道具。

不遜：相手に対してもりくだる気持ちがないこと。思いあがつてること。

定跡・定石：過去の様々な対局の研究により、最善とされ、定型となつた将棋や囲碁の指し方や戦法。

棋譜：囲碁・将棋で対局の手順を数字や記号で表した記録。

茴香：セリ科の多年草。

問一——線部1「まだまだ、って、どうしてわかるの」とあるが、なぜ朝倉くんは「まだまだ」だと言うのか。次のなか

ら適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭の中ではこれから活けようとする花の完成図が見えているのだが、それと全く同じように活けられてはいないから。イ 花を思い通りに活けられる技術が身についたとしたら、そこで花を活ける気持ちよさに自然と気づかされるはずだから。

ウ たとえ花を思い通りに活けられて気持ちよくなれたとしても、常にまだまだだと思つて努力すべきだと思つているから。

エ 花を思うように活けられると、花を活ける気持ちよさが長く続くはずだが、毎回それが感じられているわけではないから。

問二——線部2「千尋が私の左肘をつついて止めようとしている」とあるが、ここで紗英、朝倉くん、千尋の関係はどういうなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 朝倉くんは自分がまだ未熟な花の活け方しかできていないと理解できいて、紗英は自分もそんなかしさを持ちたいとうらやましがついているが、繰り返し同じような質問をする紗英の様子が彼を困らせているので、千尋は質問をやめさせようと思っている。

イ 朝倉くんは自分の思うように花を活けることができないと自覚していて、紗英はなぜ彼がそう判断できるのかを知りたがつて続けざまに質問をしているが、その様子には少し強引なところが見られるので、千尋は紗英にそれとなく気づかせておこうと思っている。

ウ 朝倉くんは自分が自在に花を活けることができないと自覚していて、紗英はそんな冷静さを持つためにはどうすればいいかを彼から聞き出そうとしているが、二人の会話があまりかみ合っていないので、千尋は一人の会話に割つて入ろうと考えている。

エ 朝倉くんは自分の花を活ける技術はまだ不十分だと気づいていて、紗英は活け花は技術がすべてではないと思っているので彼の考えに疑問を感じているが、紗英の遠回しな言葉が朝倉くんをとまどわせているので、千尋は言い方への注意をうながそうとしている。

問三——線部3「しようがないわねえ」とあるが、この時の先生の気持ちはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紗英の花は型をそれで花の美しさが台無しになつており、真剣に取り組めていない紗英の様子を腹立たしく思う気持ち。イ 紗英の花には迷いが表れていてまとまりがなく、活け花に集中できない紗英の様子を困ったものだと思う気持ち。

ウ 紗英の花は花の形や個性が生かされておらず、花の基本形を大事にしていない紗英の様子をいらだたしく思う気持ち。エ 紗英の花からは活け花を愛する気持ちや情熱が感じられず、面白半分で活けている紗英の様子を許せないとと思う気持ち。

問四——線部4「真剣に考えたらこうなつたんだ」とあるが、紗英はどのように考えて花を活けていたのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然の花は自分の思つた通りになるものではないので、自分の思いよりも花のあるままの姿を生かして活けてみようとした。うと考えていた。

イ 自分が思つた通りに花を活けようとしてもうまくいかないので、できるだけ自分の考えを反映させないで花を活けてみようとした。うと考えていた。

ウ 活け花は自分の思いなど超えたところにある世界なので、わざと自分の思いとは逆になるように花を活けてみようとした。うと考えていた。

エ 自分は型をふまえて思つた通りに花を活けることがまだできないので、あえて型を意識せず自由な気持ちで花を活けてみようとした。

問五 — 線部5 「急に、目の前の花が色褪せて見える」とあるが、それはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生の行動を振り返ってみると、自分に対する愛情がないように感じられて、このまま同じ先生に習い続けることがいやになってしまったから。

イ 今の教室の様子を見ていると、自分と気持ちが同じで理解し合える人がいないように感じられて、このまま教室に通い続けることがむなしくなったから。

ウ 今のやり方のまま花を活けていても、ただ花を型通りに活けることしかできないように感じられて、活け花を習っていることがつまらなくなつたから。

エ 先生の言葉を考え直してみても、先生は一つの花の活け方しか認めていないように感じられて、多様な表現が許されないことにうんざりしてしまつたから。

問六 — 線部6 「紗英子なら呼べる」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「子」をつけることでクラスメイトは気がねなく紗英の名前を呼べるようになり、紗英に対して軽い気持ちで声をかけてかまうことができるようになるということ。

イ 「子」をつけることでクラスメイトは冗談を言うような口調で紗英の名前を呼ぶようになり、紗英の本当の気持ちなど考えることもなく軽口を言い合えるようになるということ。

ウ 「子」をつけることでクラスメイトはからかうような気分で紗英の名前を呼ぶようになり、紗英に対して心の中ではばかりにして対等には扱わないようになるということ。

エ 「子」をつけることでクラスメイトはアイドルのような存在として紗英の名前を呼ぶようになり、紗英のことをはなやかな女の子として憧れの目で見るようになるということ。

問七 — 線部7 「自転車置き場まで並んで歩く」とあるが、この時の朝倉くんの気持ちはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紗英はどう花を活けるべきか迷っているが、周囲には新しい活け花を生み出そうとする紗英の挑戦に共感している者もいて、自分もその一人であることを知つてもらいたい。

イ 紗英は活け花で自分に反抗しようとしているが、まずは自分が身につけてきたものを紗英も習得することが大切で、そのためにはまだまだ教室に通い続けた方がよい。

ウ 紗英が自由な表現を求めているのは理解できるが、たとえ先生個人がきらいでも技術を学ぶことには価値があり、先生に教えを受け続けることの大切さを分かつてもらいたい。

エ 紗英がどんな意図で花を活けたのかある程度想像できるが、活け花では自分を表現する前に身につけておくべきことがあるので、簡単に教室をやめてほしくない。

問八 — 線部8 「母は察したように穏やかな声になる」とあるが、この時の母の様子はどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紗英は自分の好きなように花を活けたいと思っているが、その方法を分かつていないことが感じられるので、すぐにあきらめないことが大事だということに気づいてもらおうとしている。

イ 紗英は型をうまく身につけられずにならんでいるが、今度もまた紗英に根気がないことが原因だと気づき、ねばり強く取り組んでいけるように、ゆっくり話しながらさとしていくとしている。

ウ 紗英は自分がどんな花を好きなのか見つけようとしているが、それはみんなと同じことをやりたがらない紗英だからこそその問い合わせるところを見つけるまで見守ろうとしている。

エ 紗英は花をどう活けたらいいのかなんやんぐでいるが、それはいつものように紗英が決まり事に従うのが苦手なことと関係していると分かるので、そのなやみにやさしく付き合おうとしている。

問九 線部9 「その点、囲碁はいい」とあるが、ここに見られる紗英の考えはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖母や姉は将棋も囲碁も集中しなければ勝てないと思っているが、紗英は一手もおろそかにできず息が詰まる将棋に対し、囲碁は後から逆転すればいいので簡単だと感じている。

イ 祖母や姉は将棋も囲碁も定石通りに打つことで上達すると考えているが、紗英は囲碁についてはあくまで自分の力で打ちたいので、あえて定石を覚えたくないと考えている。

ウ 祖母や姉は将棋も囲碁も同様に定石を覚えることが大切だと考えているが、紗英は将棋よりも石の置き方一つで形勢が変わるもののが、性に合っていて好ましいと思っている。

エ 祖母や姉は将棋も囲碁も最短で勝つことこそ美しいと思っているが、紗英は盤上のあちこちで陣地の取り合いがあり、定石が役に立たない囲碁の方により美しさを見出している。

問十 線部10 「『さえ』が本気になる」とあるが、紗英が「本気」になったのはなぜか。七〇字以上、九〇字以内で説明しなさい。

問十一 線部11 「意外だったけど、面白くなりそうだ」とあるが、この時の朝倉くんの気持ちはどのようなものか。次の二つの中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紗英が新しい型を作ることに想像以上に本気になつたと感じ、力をつけて自分のライバルになると思いつらうれしくなっている。

イ 紗英が型とは何かを本当に考え始めたと感じ、彼女と手を取り合つて活け花をもつと楽しいものにしたいと意気込んでいる。

ウ すっかり変わった紗英の花から彼女のやる気を感じ、教えがいのある存在になると彼女のさらなる進歩を心待ちにしている。

エ 紗英が本気で活け花に取り組み始めたことに気づき、彼女の活けた花から可能性を感じてこれから成長に期待している。

問十二 線部12 「『さえ』、つて呼ばないで」とあるが、この時の紗英の気持ちはどうなものか。次の二つの中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア まだ自分の活け花は未熟なため自分の花を活けることができず、朝倉くんからも「『さえ』」と名前を軽々しく呼ばれてしまふが、祖母からもらった助言を心の支えに努力を始めた今の自分を大事にしていきたいと感じている。

イ それほど親しくない友達に名前を「『さえ』」と呼ばれることはまだがまんできるのだが、活け花を通じて本当の自分を見せたいと思っている朝倉くんには、どうしても本当の名前で自分を呼んでもらいたいと思っている。

ウ 今はまだ自分と呼べるものしつかりはあるわけではなく、朝倉くんからも本当の名前ではなく「『さえ』」と呼ばれてしまうが、いつかきちんと自分を持ち、自分らしい花を活けることができるようになりたいと願っている。

エ 朝倉くんは都合のよいところしか見ていないのに、すべて見通しているかのような調子で「『さえ』」と呼ぶのが腹立たしく、もつと真面目な気持ちで「紗英」という人間や「紗英」の花に向き合つてほしいと思っている。

一、次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。

私はX分かつてゐるつもりの画一的思考が陥つた例として、ピロリ菌の発見をよく思い出します。

慢性胃炎と胃癌の原因とされ、日本人の二人にひとりが持つてゐるピロリ菌が発見されたのは、一九八二年オーストラリアの二人の医師によつてです。ヒトの胃から採取したらせん状の細菌の培養に成功したのです。

酸性である胃の中で生息する細菌がいることは、その百年前から散發的に報告されていました。しかし一九五〇年代になつて米国の病理学の大御所が千人以上の胃の生体標本を調べ、細菌は発見できなかつたと報告して以来、三十年の長きにわたつて、胃酸環境内無菌説が信奉され続けました。

当時、胃の内視鏡が最も発達して、よく使われていたのは日本でした。ですから、国内の何千人の消化器内科の医師たちは、日々、患者の胃の中をのぞいていたはずです。胃液を採取して顕微鏡で検鏡した医師も、何百人かはいたでしょう。たまたま何か細菌のような物体を見ても、これはゴミか、アーチファクト（人工産物）だと見なして、それ以上の追求はやめていたと考えられます。

まさしく大御所の間違つた高説を記憶し、理解し、さつさと片づけたいという欲望が、ピロリ菌の発見を遠ざけたと言えます。

（中略）

私が三十年近く友誼をいただいている方に、Aシンケイ心理学者の山鳥重先生がいます。脳と心のつながりといふ極めて微妙な問題を、分かりやすい言葉で解き明かしてくれます。

脳が理解する、分かるのはどういうことかについても、素晴らしい記述があります。

山鳥先生によれば、分かるといつてもその水準はさまで、浅い理解と深い理解があるといいます。浅い理解でとどまりやすいのは、重ね合わせ的理解です。いわゆる小さなまとめた理解を積み重ねて、大きな理解を目指します。しかし現実は、そういうまくいくものではなく、いくら積み重ねても断片のままで残つてているのが実情でしょう。前に述べたピロリ菌の発見も、何千人何万人何十万人という内視鏡検査の蓄積があつても、不可能だったのです。

これに対する、山鳥先生は発見的理説を推賞します。これには既存の理解や教科書は、あまり役に立ちません。自分で発見していくしかないかたちの理解です。<sup>2</sup>それに自然というモデルが参考になります。自然にはマニュアルがありません。自然の解説の足がかりとして立てられるとしたら、自分の考えた仮説くらいです。

この仮説にゾット自然を観察し、うまく説明できるかどうかを検証します。この検証には到達点がありません。不斷に検証を自ら重ねることによって、深い理解、発見的理説に到達します。

この山鳥先生の見解は、そのままキーツのネガティブ・ケイパビリティを想起させます。キーツは詩人や作家が、ヒトを含めた自然と対峙したとき、今は理解できない事柄でも、不可思議さや神秘に対して拙速に解決策を見出すのではなく、興味を抱いてその宙吊りの状態を耐えなさいと主張します。ヒトと自然の深い理解に行きつくのには、その方法しかないのです。<sup>3</sup>そうやって得られた理解は、その本人にとっての地図になり海図になるのでしょう。

キーツがそれまでにない深いかたちで古代を描いた長詩を書き、また現世的な恋愛詩を書くことができたのも、そのおかげでした。

分かったがる脳が、何やらわけの分からぬものを前にして苦しむ実例が、音楽と絵画で見られます。

例えばクラシック音楽を初めて聴いたときなど、多くの人は「分からん」と言つてサジを投げます。しかしもともと音楽など分かるはずではなく、分からなくていいのです。味わうだけです。雄大な景色を味わうようにして、そこに身を浸せばいいだけの話です。晴れた日の山頂からの景色を見て、「分かつた」と言う人はいないはずです。

もともと音楽は、分かることなど前提としていません。答えが出ないもののへの不斷の挑戦と言つていいでしよう。愛児を失つたどうにもならない悲しみ、あるいは恋人を得たときの喜びを、Cカシや人の声、打楽器や管楽器、弦楽器がそのままうたい上げます。答えを出してはおしまい、というような深みを音で追求していきます。分かることを拒否して、そのずっと奥の心のひだまで音は到達して、魂を揺さぶるのです。

分かることを拒否する点では抽象画も似ています。例えば、南仏のアンティーブでアパートから身を投げ、四十一歳で死んだニコラ・ド・スタイルの「サッカー選手」と題された一連の作品があります。赤や黄や白、黒や紺のブロックのかたまりが、せめぎ合つてゐるような画面です。サッカーを描くのであれば、数人がボールを取り合う写真が一番手つ取り早い

のでしようが、ド・スタイルの絵は、確実に写真を超えて、そのせめぎ合いが伝わってきます。色と色のブロックがぶつかっているところに、汗が飛び散り、周囲の色からはサポートーの声援も聞こえきそうです。絵を前にして、見る人はサッカー場にいる錯覚がします。画家の興奮がこちらにも伝わり、応援したくなるような色と形、筆のタッチなのです。分かることを拒否したうえで、さらなる高みで感覚に訴えるのが抽象画です。脳はまたそこで、自分が一段と進化した喜びを味わっているのかもしれません。

もうひとつ、最近心に残った隨筆に、作家黒井千次氏の「知り過ぎた人」があります。

黒井氏は若い頃、某新聞の書評委員をツトめていました。月二回ほどの会合に十数名が集まり、誰がどの本の書評を書くか決めるのです。その会合で、あるとき高名な大作家が、若手の文芸評論家で博覧強記で知られた大学教授に、ある質問をしたそうです。すると例によつて外国語にも堪能なその教授は、即座にそれはこうこうこうですと答えました。こんなやりとりが何回も続いたため、大作家は「俺はもう、あんたにはものを訊ねないよ。何を訊いても知らないことがないのだから、つまらないよ」と、半ば冗談めかして言つたのです。

黒井千次氏は、そこに大作家の本心を感じとつた思いがしました。大作家は、相手に、自分が抱く疑問に参加し、一緒に考えてみる姿勢を期待したのに違ひなかつたからです。そして大作家のその言葉に、謎や未知の事柄に向き合うときの姿勢を読みとつて感動したといいます。

(中略)

黒井千次氏は八十代半ばの大作家であり、日本芸術院長もつとめられてはいるので、その意を尽くした文章を味わつてもらうために、そのまま引用します。

それにしても、とあらためて考えざるを得なかつた。謎や問い合わせには、簡単に答えが与えられぬほうがよいのではないかと。不明のまま抱いていた謎は、それを抱く人の体温によって成長、成熟し、更に豊かな謎へと育つていくのではあるまいか。そして場合によつては、一段と深みを増した謎は、底の浅い答えよりも遥かに貴重なものを作り出しているような気がしてならない。

全くそうです。ネガティブ・ケイパビリティは拙速な理解ではなく、謎を謎として興味を抱いたまま、宙ぶらりんの、どうしようもない状態を耐えぬく力です。その先には必ず発展的な深い理解が待ち受けていると確信して、耐えていく持続力を生み出すのです。

(帚木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』)

㊁ 大御所：ある分野での第一人者として大きな力を持つてゐる人。

信奉：ある学説や主義・主張、特定の宗教などを最上のものと信じて従うこと。

友誼：友情、交友関係のこと。

キーツ：十九世紀に活躍したイギリスの詩人。

対峙：二つの勢力が向かい合つてゐること。

拙速：出来は悪いが仕上がりは速いこと。

博覧強記：広く書物を読み、いろいろな事をよく記憶していること。

堪能：技能・学芸などにすぐれ、深くその道に通じてゐること。

問一 ～～線部A～Eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二――線部1「浅い理解」とあるが、「浅い理解」にとどまりやすい例に当たるものはどれか。次のの中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 気象についてよく知るために、通説を知るだけではなく自分でも観測を続けながら気象に対する興味を深める。

イ 戦国時代に活躍した武将たちの様々な逸話を集めることで、戦国時代の全体像を理解していこうとする。

ウ 自分の店のレシピを作るために、いろいろな材料を吟味し、少しづつ改良を加えながら試作を繰り返す。

エ 動物の行動には何か決まりがあるのではないかと考え、生態を調べ、実験を行つて自分の考えを確かめる。

問三——線部2「それには自然というモデルが参考になります」とあるが、「自然」について考えてみると、「発見的理解」とはどのようなものだとえるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「発見的理解」とは、自然の成り立ち方があらゆるもの的基本だと考え、自然の構造からうまく説明できるかどうかを検証することで未知のものを解明し、深い理解に到達するものである。
- イ 「発見的理解」とは、自然を少しずつ解明していくことで次第にその全体像が見えてくるように、小さな理解をこつこつと積み重ねていくことで得られる大きな理解を目指すものである。
- ウ 「発見的理解」とは、自然を自分の仮説を足がかりに検証を重ねながら解明していくように、これまでのやり方では分からぬことも自分で探り見極めながら理解を深めていくものである。

- エ 「発見的理解」とは、マニュアルの存在しない自然を解明するために、自分自身の力でマニュアルを作成し、それに従つて観察と検証を繰り返すことで深い理解を手に入れるものである。

問四——線部3「そうやつて得られた理解は、その本人にとつての地図になり海図になるのでしょうか」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ヒトと自然に対する深い理解は、自分が世界をどこまで知ることができたか、未知の分野は何なのかということをはつきり示してくれるものになるだろうということ。
- イ ヒトと自然に対する深い理解は、ヒトの歴史とはどのようなものであり、自分たちが様々な感情とどう向き合えばよいかを示してくれるものになるだろうということ。
- ウ ヒトと自然に対する深い理解は、世界とはどのようなものであるのかということを、まるで世界の見取り図のように明解に示してくれるものになるだろうということ。

- エ ヒトと自然に対する深い理解は、ヒトである自分たちはどのように位置づけられるか、どのように生きていけばよいかを示してくれるものになるだろうということ。

問五——線部4「答えが出ないものへの不斷の挑戦」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽は、表現したい感情や思いなどをどうすれば音で表せるか正解があるわけではないので、常にその表現を追求する試みが様々に行われることになること。
- イ 音楽は、聞き慣れていない人にとっては少し分かりづらいものなので、どうすれば理解してもらえるか、失敗を繰り返しながら探し続けることになること。
- ウ 音楽は、悲しみや喜びなどを表現する際、これが答えだとうに完成させてしまうと深みが出ないので、必ずその直前でとどめられることになること。

- エ 音楽は、人に理解されることを目的としておらず、より高みを目指して感情に訴えかけるうたや演奏などの技術を向上させながら作られることになること。

問六——線部5「さらなる高みで感覚に訴えるのが抽象画」とあるが、「さらなる高みで感覚に訴える」と可能にしているのは「抽象画」のどのような点か。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現実的な人や物の姿を捨てて色のかたまりで表すことによって、かえつて写真以上の現実らしさを生み出す点。
- イ 一見してよく分からぬ形や色なのに、よく見ると何を表しているかがきちんと分かるという錯覚を楽しめる点。
- ウ 現実を正確に描写する分かりやすさをはなれて、色や形体の力、筆のタッチから表現内容をこちらに伝えてくる点。
- エ 人々の様子を色彩が勢いよく動くような筆づかいで描くだけなのに、描いたものを分かりやすく表現できている点。

問七　——線部6「自分が一段と進化した喜び」とあるが、どのような喜びのことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わけの分からぬものを苦労して分かつたことによつて、自分の理解力について新たな自信が生まれた時の喜び。  
イ 分かりたがる脳が理解できないような物事に出会い、分からなくても良いのだ、ということに気づいた時の喜び。  
ウ 安易に分かつたつもりにならず、感覚や心の中に訴えてくるものを受け止め、味わおうとする時に得られる喜び。  
エ 分かることをあきらめたはずなのに、むしろその姿勢によつて目にした物事の理解に到達することができた喜び。

問八　——線部7「俺はもう、あんたにはものを訊ねないよ」とあるが、ここでは大学教授と大作家の間でどのようなすれば違ひが起こつてしまつたと考えられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大学教授は単に質問の正しい答えを求められたと思っていたが、大作家は質問にすぐに答えが返つてくることを求めたのではなく、その疑問に向き合う時間を共有することを求めていたということ。

- イ 大学教授はたまたまその質問にすべて答えられてしまつたが、大作家はこの大学教授でも知らないことについて樂しく語り合うことによつて、親交を深めることを会話の目的と考えていたということ。

- ウ 大学教授には自分の博識を自慢するつもりは全くなかつたにもかかわらず、大作家はそれが自分の知識を自慢げにひけらかすような、鼻につく態度であると受け止めてしまつたということ。

- エ 大学教授は大作家の質問に軽い気持ちで答えたが、大作家は質問の答え 자체に興味はなく、大学教授が質問に対しても真剣に考え、議論してくれる人物かどうかを確かめるために質問をしたのだということ。

問九　——線部X「分かつてゐるつもりの画一的思考」とあるが、これに陥らないようにするためにはどのような姿勢が必要だと筆者は考へてゐるか。文章全体の内容をふまえて、七〇字以上、九〇字以内で説明しなさい。

平成三十一年度  
一般入試②  
国語解答用紙  
(1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧

解答用紙  
2

## 合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問七	問四	問一
問八	問五	問二
問九	問六	問三

問十

平成三十年度  
一般入試②  
国語解答用紙  
(2)

不二山房詩稿

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧

## 受驗番号

氏名

小計

問一	
D	A
E	B
C	

問二

  

問三

  

問四

問五

  

問六

  

問七

問八

# 問九

平成三十年度 一般入試② 国語解答用紙（1）

受験番号

氏名

解答用紙  
2

合計

◆右のらんには何も書かないこと。
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧

問士 工

問士 ヴ

問十			
フ	身	リ	ご
だ	の	と	紗
か	花	身	英
ら	を	に	は
。	活	つ	型
	け	だ	が
	ら	と	た
	れ	氣	く
	る	づ	ぐ
	よ	か	ざ
	う	そ	ん
	に	れ	の
	な	、	知
	り	型	惠
	た	ま	に
	い	ず	育
	と	は	ま
	強	型	れ
	て	を	て
	く	自	き
	思	分	つ
	自	自	た
	か	か	す

問七 工

問八 工

問四 イ

問五 ヴ

問一 工

問二 イ

問九 ヴ

問六 ア

問三 ア

平成三十年度 一般入試② 国語解答用紙（2）

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧

小計


	D	A
	務	神 経
	E	B
	宿	沿
	C	歌 言 司

◆右のらんには何も書かないこと。

問一	
D	A
務	神 経
E	B
宿	沿
C	歌 言 司

問三

問二

問五

問六

問四

問七

問八

問九

達	耐	ね	理	自
し	え	、	解	分
よ	、	た	し	が
う	詰	と	よ	詰
と	に	え	う	に
す	対	理	と	出
る	し	解	せ	会
姿	て	解	せず	つ
勢	發	で	き	た
。	展	な	自	時
70	的	く	ら	、
な	な	て	仮	通
よ	も	も	説	説
り	興	を	な	ば
深	味	立	立	ど
い	を	マ	マ	か
理	失	檢	ら	
解	わ	証	安	
に	す	を	易	
到	に	重	に	